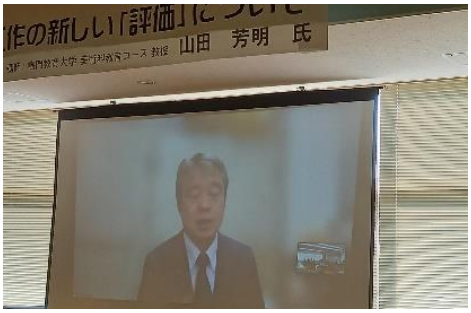
図工･美術教育理論　研修会　終了報告

テーマ	中学校美術･小学校図画工作の新しい「評価」について
日　時	令和　4年　7月26日（火）
会　場	石狩教育センター
講　師	山田　芳明　氏 （肩書:）鳴門教育大学大学院　学校教育研究科　教授
参加者	約　33名

研修会の様子



小さい子が落ちている石や棒の中から「いい石」「いい棒」を見つけ出すことがあるという例えから『子どもたちは自分なりの意味や価値をつくり出すことができる』ということを共通理解しました。そして、その感性を大切に育てていくことが教師の仕事であると学びました。（先生方も子どもたちが石などを拾って見せてくれた経験を思い出し大きくうなずいていました！）

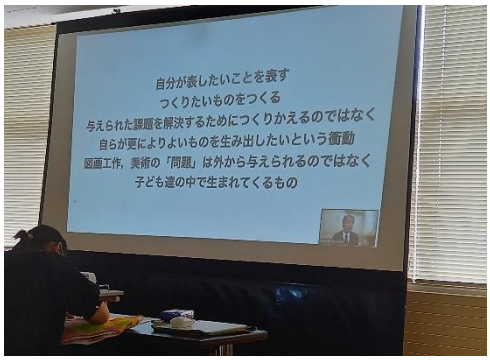
子供が道具を使うときには、覚えている感覚をもとに新しい感覚を想像し、行動する中で、新しい感覚を構成するということから、初めて使う道具を指導する際には、正しく使っていて楽しくなるような方法を適切に指導する必要があると学びました。（先生方は例えで、キャベツを包丁で切る感覚を想像することで、確かに使ったことがある道具には感覚が残っていることを感じていました。）

学習指導要領改訂までの歴史を振り返り、現在の学習指導要領は、評価基準が明確になっていることが分かりました。しかし、それを実際に子どもの姿に当てはめることが困難であるという話になりました。

評価する上で大切なことは、授業の前にどの場面で何についての評価を行うか明確にすることや、できた作品だけではなく、机間指導の中で子どもの表情、子どもとの会話など制作過程での評価することが大切だと学びました。

さらに、各学年で求められることを知識、技能、思考･判断･表現の観点から一つずつ教えていただきました。（先生方は、一つ一つ確認しながら、大切なところには資料に線を引き聞いていました。）

指導と評価を一体化させなければいけないという話もありました。指導計画と共に評価計画を立てることが必要であることや、子どもたちの学習改善や教師の指導改善につながるように評価基準をどのように活用するかを明確にして学習活動に位置付けることが重要であると学びました。このことから、学習活動が順調に進んでいる時は評価基準のＢに全員達しているともいえるという話もよく理解できました。

		最後には、実際に子どもたちが作品を作っている写真から、この様子に対してどのような観点で評価をするか話し合う時間もありました。具体的な場面で評価をする練習ができたので非常に勉強になりました。 その中で、作品を作る経過で「思うようにできた」喜びで笑顔になっていく男の子の表情が写った写真がありました。それを見て、このような表情を引き出すような授業を目指していきたいと多くの先生方が思い、その写真に先生方も笑顔になる場面がありました。

【全体の感想】

図工・美術の教育の中で育んでいきたい力とは何かからはじまり、道具を適切指導する大切さ、学習指導要領に記載されていることの意味の確認、具体的な場面での評価の仕方まで、たくさんのことを学ぶことができ、今までの指導の振り返りやこれからの授業の改善につながる有意義なものとなりました。

具体的には、指導する前に評価基準を明確にすること、制作過程の子どもの姿を大切にすることを頑張って取り組んでいきたいと思います。